

トップリーグ雑感

プレーオフトーナメントセミファイナル

パナソニック ワイルドナイツ vs 東芝ブレイブルーパス^(*)

トップリーグもリーグ戦が終りトップ4チームのプレーオフの戦いとなりました。
 新聞のスポーツ欄に「武骨なパナソニック」^(*)という見出しがあり興味深く読みました。
 この見出しを元に考えてみたいと思います。

その一

「最初にタックルする選手が、ことごとく相手を倒した」(中略)「だから密集に人数を割かずに済む」
 相手一人に対し二人または三人で倒すのを勧めたり励ましたるのを見聞きしますが、ラグビーの大原則 equal condition に反するものであり、仕方なくそうってしまった場合以外は良いことではありません。ラグビーは人数の「余し」や「交わし」で相手のバランスを崩し合う競技です。「そうやって余裕の生まれたFB三宅が、狙い澄ましてパスをインターセプト」も equal condition に基づいた flair play です。

その二

「みぞおちとひざの間に、確実に体の「芯」を当て続ける」
 タックルは低い程よいと考えている人がいますがそうは言い切れません。低い dive (飛び込む) は危険です。タックルで爪先が地面から離れてはいけません。しっかり肩を当て drive (前に出て) です。「みぞおちとひざの間」となっていますがヘソから上は高いと考えている人が多いですがこの高さは重要な意味があります。ヘソから上になることで方向が水平より上向きになります。

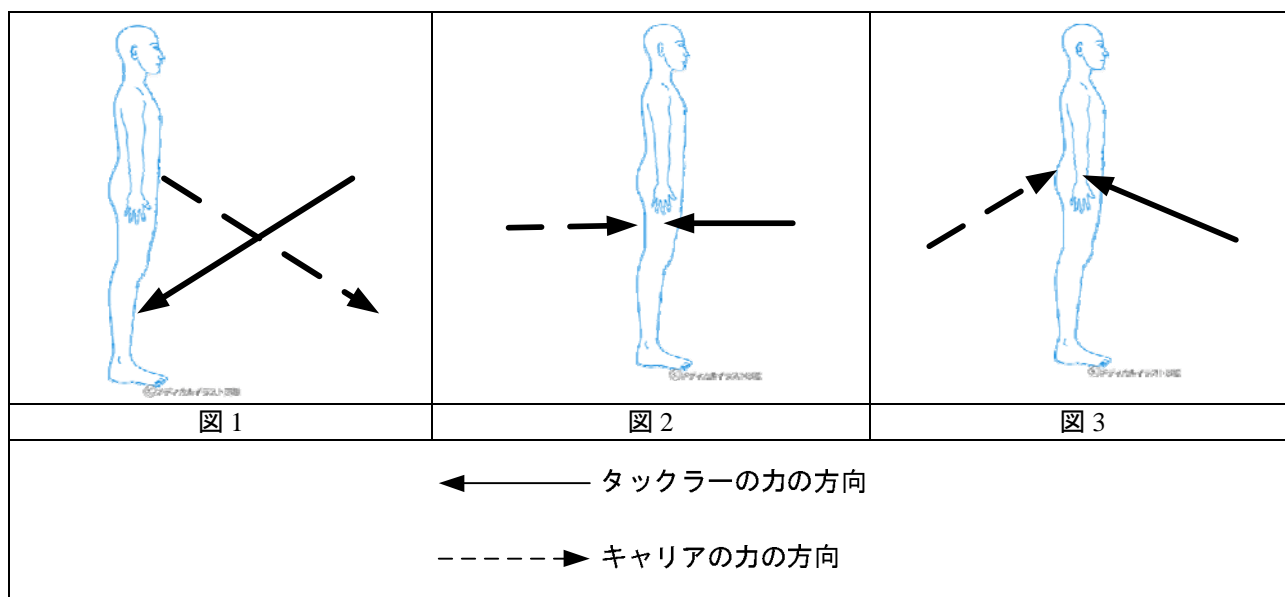


図1 および図2 に比べ図3 は上方への力の逃げ道があります。「痛い」と書いてありますが図1 および図2 より痛さも危険も少ないのです。当たり具合によって、smother tackle に持っていくことも考えられます。「武骨な防御」というよりも理にかなった正しい防御で戦ったと言うことです。

最後に

「個々がやるべきことをやった結果」
 パナソニックの勝利はラグビーの identity の一つである “one for all” を忠実に楽しんだ結果と言うべきでしょう。
 念のため all for one ではありません。

*1: <http://www.top-league.jp/game/2013/score8461.html>

*2: 2014年2月2日朝日新聞大阪版朝刊より

武骨なパナソニック

東芝にも好機はあった。ただ、攻めても攻めてもパナソニックの防御は崩れなかった。なぜか。

答えは単純明快。最初にタックルする選手が、ことごとく相手を倒したから。25-8で迎えた後半10分、だめ押しのトライを導いたプレーは象徴的だ。

攻め込まれても慌てない。みぞおちとひざの間に、確実に体の「芯」を当て続ける。痛い、最も効果的に相手を地面にたたきつけられるタックル。「1年間、繰り返し練習してきた」と主将の堀江は言う。

だから密集に人数を割かずに済む。そうやって余裕の生まれたFB三宅が、狙い澄ましてパスをインターセプト。約50メートルを独走し、球をつないで霜村がインゴールへと飛び込んだ。

相手パスを奪っての逆襲は得意芸。「接点でFWが頑張ってくれるから、外に立つバックスは思い切って前に出られる。借頼関係の成せる業」と三宅は誇る。レギュラーシーズン14試合の計202失点はリーグ最少だ。大一番で華やかに重ねた8トライを、武骨な防御が支えている。

「個々がやるべきことをやった結果」と中嶋監督は大勝を総括した。平凡な言葉の意味は、深く重い。(中川文如)